# 「糸女覚え書」の構図

勝倉壽一

## 一　歴史小説の構想

芥川龍之介の歴史小説「糸女覚え書」（大正十三・一「中央公論」）は、慶長五年（一六〇〇）七月、徳川家康、石田三成を総大将とする東西両軍が激突した関ヶ原の戦の折に、三成側による大名の内室人質策の犠牲となった細川越中守忠興夫人秀林院（洗礼名ガラシャ）の死への顛末を記したものである。芥川は語り手として糸女なる侍女を設定し、二十三ケ条にわたる報告書の形式を用いて、三成側の軍勢を迎えた忠興留守邸の混乱した様相を活写している。

この作品の成立事情と構想を窺い知る資料としては、つとに吉田精一氏が典拠として「霜女覚え書」という史料の存在を紹介されたが、[1] 武藤光麿氏は細川家所蔵の同史料の全文を翻刻・紹介し、芥川が典拠としたことを検証された。[2]「霜女覚え書」は、秀林院の遭難時に、その遺命を受けた侍女入江霜が、事件から四十八年後の正保五年（一六四八）二月十九日、時の当主細川光尚に提出した九ケ条の殉難始末書である。「糸女覚え書」はこの史料の始末書形式を模倣しており、殉難の顛末の史実はこれに拠ったと考えられる。

ところで、細川家に所蔵されたこの史料を、芥川はどのようにして披見したのであろうか。つとに、山本健吉氏は徳富猪一郎（蘇峰）著『近世日本国民史』の『家康時代上巻・関原役』に所載の「霜女の覚え書のパロディを作らうと試みた」[3]ものであると説かれた。「霜女覚え書」の全文は武藤氏に次いで吉田氏も紹介されたが、[4] 吉田氏の紹介文は『近世日本国民史』に所載の蘇峰翻刻文と同文である。

この蘇峰翻刻文と武藤氏翻刻文を比較してみると、

第一条の日付（傍線部）（傍線勝倉、以下同じ）

- 石田治部少乱の年七月十三日に、……（蘇峰）
- 石田しぶのセうらんのとし七月十二日に、……（武藤氏）

第一条の脱落部分（傍線部）

- 如何候はんと被ㇾ申候故。則秀林院様へ、其通申上候へば、秀林院様御意被ㇾ成候は、……（蘇峰）
- いかゝ候ハんやと申され候ゆへすなわちしゆうりんゐん様御意なされ候ハ、……（武藤氏）

など、細部に多くの相違が認められる。

とくに、三成方が諸大名の内室を人質に取るという風聞について、留守居役小笠原少斎、河北石見が対応を秀林院に問い合わせた日付について、武藤氏紹介の史料には「七月十二日」とあるが、芥川の「糸女覚え書」、その草稿と見られる未定稿「烈女」（大正十二）はともに「七月十三日」となっており、芥川は『近世日本国民史』の蘇峰翻刻文に拠ったものと推定される。同書は「糸女覚え書」の執筆に先立つ

大正十二年一月に刊行されており、芥川の書簡によれば、以前から蘇峰に関心を有していた芥川は、『近世日本国民史』を愛読していたことが窺われる。[5]

なお、語り手糸女の出自について、芥川はこれを「魚屋（なや）清左衛門」なる南蛮貿易商の娘に設定しているが、これは『近世日本国民史』に所載の「菜屋（納屋）助左衛門」の振り、また、細川家の奥向き男子禁制の家風を笑う黒田家臣「森太兵衛」の設定は『黒田家臣伝』に出る黒田家の重臣「母里太兵衛」の振りであると推定される。菜屋助左衛門は別名「呂宋助左衛門」と呼ばれ、琉球・ルソンなどの海外貿易で知られた。[6] 黒田家臣母里太兵衛は、三成方による大名の内室人質策に対して、主君黒田如水・長政の内室を無事に大坂から脱出させたことでも知られる。芥川が尊敬し、その歴史小説を範とした森鷗外の「栗山大膳」（大正三・九「太陽」）に黒田夫人救出の顛末が記されており、芥川はこれを披見したはずである。芥川はこれらの史料・先行文献を踏まえて「菜屋清左衛門」「森太兵衛」を設定したのであろう。

ところで、この「糸女覚え書」は芥川のいわゆるキリシタン物の最後の作品とされるものであり、吉田氏の紹介によれば、芥川は「吉利支丹七部集」の構想を有していたという。[7] しかし、この作品は一般に完節の貞婦、敬虔なキリシタンの伝説の美女ガラシャの偶像破壊を意図したものと解されており、総じて作品の評価は低い。

一方、芥川の「手帳」には、「糸女覚え書」「烈女」などの構想メモが残されている。

① 細川忠興夫人の自殺。自殺と聞いて悲観してゐたクリスチアン、他殺と聞いてよろこぶ。（手帳三）

② 大事件の owen として a crowd of butterflies を見る事。（同・四）

③ 武士の妻。Christ is a coward。細川忠興夫人の死。suicide 問題。（同・八）

①はキリシタンのエゴイズムを指すか、ガラシャの救いに安堵した意か不明であるが、「糸女覚え書」では、宣教師による自殺した夫人の救霊の否定と、救霊のミサに事寄せて銀貨を乞う宗教家の卑俗な功利心を記した第十九項がこれに相当する。また、③の前半部「武士の妻。Chist is a coward」というメモはキリシタン物「おしの」（大正十二・四「中央公論」）として成立した。「おしの」は、十字架上のイエスの苦悩や懐疑を臆病・意気地なさの証拠として唾棄する武士の妻を通して、キリシタン信仰と封建武士道倫理との絶望的な懸隔を描いたものである。

一方、②は未定稿「烈女」の中に大凶時に乱舞する蝶の群に語り手が凶兆を感じる場面として用いられている。「烈女」は、史料「霜女覚え書」に準拠して、典拠の記載を追いながら霜女と思しい秀林院付けの侍女が事件の顛末を語るという、主観や回想を交えた体験報告形式の文章で未完である。同史料には存在しない忠興夫妻の伝説や幾分の創作部分を加えているが、総じて才色兼備した完堅の貞女とするガラシャ伝説に準拠しており、戦乱の世に信仰と節義に殉じた夫人の覚悟の高さを描いて、偶像破壊の意図や信仰への懐疑などは全く窺われない。大正十一年九月の「おぎん」（「中央公論」）から十二年末の筆になる「糸女覚え書」に至るまで、信仰者への崇敬と批判、信仰への賛仰と懐疑・否定などの両極端を示す作品や、構想メモ、未定稿などが書き残されている事実は注目に値する。

さらに、この事実をキリシタン物の枠組より広く、近世初期の人物群像に焦点を当てた歴史小説の構想として見れば、同時期の「手帳」には「清正と家康（佐渡守）」「家康と直弼」「淀殿の天下取りの祈禱」「且元と佐渡守。New 桐一葉」「家康女を利用するに妙を得たり」などの構想メモの存在が認められる。これらはいずれも『近世日本国民史』から想を得たと考えられる。

大正十二年執筆の草稿類で注目されるのは、「商売聖母」と「天主の死」の断簡の存在である。「商売聖母」は、天草の乱を舞台に、信徒らの死骸を「石垣の上から、黙黙とその姿を見下してゐる」「白衣の聖母」の「おごそかに、悠然と」した姿が、その実は「明らかに唯の女人」であり、「一朶の薔薇の花を愛する唯の紅毛人の女人である」とする、キリシタン信仰への懐疑を綴っている。また、「天主の死」と題された草稿は、大坂落城から島原の乱に至る歴史の展開とキリシタン信仰を結ぶ要点を記した構想メモに続いて、「デウスの死・序」「天主の死・序」「天草記・序の一・徳川家康」など六つの草稿断片から成る。これらの断簡は、いずれも大坂落城時のキリシタン信徒と宣教師の、また家康側の、それぞれの対応を描いたもので、構想メモの初発部に相当する。

その壮大な歴史小説の構想は、芥川の心身の疲労のために断念されざるをえなかったが、それに代わるものとして完成を見たのが、関ヶ原の戦に関わる貞女悲話の主細川ガラシャの死を描いた「糸女覚え書」であった。「糸女覚え書」と同年に執筆された草稿「烈女」には、偶像破壊の意図は認められない。従って、糸女という虚構の語り手の設定には、偶像破壊の意図のみならず、キリシタン信仰をめぐる新たな構想が存在したと考えられる。

この作品は、近世初期の動乱の世の動きとキリシタン信仰を描くという芥川の歴史小説の構想の具体化として捉えるべきものであると考えられる。しかし、その完成形態がガラシャの死の顚末に焦点を当てた短編小説に止まったこと、及び典拠史料の表現様式に従い二十三箇条の覚え書様式を採用していることも、心身の疲労・衰弱と激変する社会の中で、自己の確かな拠り所を求めた芥川の心意の揺れを象徴的に物語るものではなかろうか。

## 二　語り手の位相

この作品の構図について、つとに岩上順一氏は糸女像に「大戦後に澎湃たるデモクラシイの嘲笑的否定精神」の形象を捉え、糸女の批判は「芥川がその時代のインテリ女性に向けて放つた批評」であるとともに、「知識層そのものの本質的運命にも懐疑と否定とを表白」した「芥川の自己批判」作であると説いた。[8] これに対して、吉田氏は作者自身を秀林院の立場に置く岩上説を批判し、「作者は糸女の立場から徹頭徹尾眺めて」いるのであり、「貞女、烈女の鑑といはれる彼女を、裏側から見て容赦ない皮肉をあびせ」、登場人物全てを「冷酷に、或は批評的にあしら」った作品であると論じている。[9]

このような偶像破壊の意図[10]、「歴史に於て伝へられる彼女の貞烈と教養と美貌とに対する抗議」[11]、さらには「キリスト教否定」[12]を読む通説に対しては、糸女の批判する秀林院の「性格、人物が信仰とどう関連するのか明らかでない。従って、殆ど批判にはなってゐない。」[13]とする指摘も存在する。

「糸女覚え書」の世界を、通説どおり語り手糸女の視座のみに即して見れば、完節の貞婦、敬虔なキリシタンとされる伝説の美女ガラシャの偶像破壊を意図した作品であるとする解釈は、それとして頷かれるであろう。

糸女の露悪的な程の毒を帯びた批判の眼は、「おん鼻はちと高すぎ、雀斑も少少お有りなされ」て、「さのみ御美麗と申すほどにても無」いとする伝説の美貌の貶下に始まり、容赦なく夫人の人間的欠陥を暴き出していく。「少しもお優しきところ無之、賢女ぶ」り、「お世辞を好」んで、嫁（与一郎室）の美貌に嫉妬する醜く高慢な虚栄心を、父親献上のカナリヤと「偽物も数かず有」る夫人所有の舶来什器類との対比によって嘲罵し、死の恐怖と心細さを「愈『はらいそ』と申す極楽へ参り候はん時節も近づき、一段悦ばしく候」と言い繕うキリシタン信

者の独善・虚飾を、「おん偽と存じ上げ候」と看破する。

その貞烈の内実についても、留守居役の無能と自身の虚勢のために無意味な死を招来した焦燥から、理由なく侍女達を叱り罵倒する取り乱した様子、三成方との交渉決裂後の信仰に縋り切れない心の乱れ、嫁の違約と無断脱出の報に誇りを傷つけられた怒りの「はしたなさ」などを暴いて、夫人の生な人間性の動揺を冷酷に剔抉していく。

糸女の仮借ない批判の眼は、周囲の人間にも向けられる。世辞をもって夫人に取り入った三成方の使者澄見の素性を「夫を六人も取り換へたるいたづら女」と罵り、与一郎内室の「御利発とは少少申し兼ね」る知能を笑い、共に留守居役の無能を嘲笑った霜女の動揺を、近眼で「日頃みなみなになぶらるる臆病者」と突き放し、宣教師の功利的打算を暴露するなど、登場人物すべてを冷酷に批評する。

また、その舌鋒は、「唯律義なる老人」にすぎない小笠原少斎と、「武道一偏のわやく人」で融通の利かない河北石見の無能・無分別な留守居役ぶり、及び稲富伊賀の人望への嫉妬の指摘などに辛辣で、夫人に生害を勧める石見の取り乱した様子、歯痛を病んで頬を腫らした少斎の「武者ぶりも聊はかなげ」な様子に皮肉な眼を注いで、貞婦の悲劇的な最期をさえも戯画化し去る。

しかし、芥川が典拠史料に存在しない架空の人物を登場させ、悪意を帯びた批判者の視座からガラシャ殉教の顚末を赤裸々に語らせた意図については、作品の構図の上から再度分析しておく必要があるのではなかろうか。芥川が語り手糸女の設定にあたり、いくつかの条件を付していることを見逃してはなるまい。

武藤氏の調査によれば、典拠史料「霜女覚え書」の報告者霜女は江州田中の城主比良内蔵助の娘で、河内和泉の城主入江氏に嫁したが、豊臣秀吉と明智光秀が雌雄を決した天正十年（一五八二）の山崎合戦で夫と死別後、秀林院に仕えたという。戦乱の巷を生き抜いた中年の武家の寡婦であり、ともに秀吉の覇権確立の犠牲者の位相を共有していたと言ってよい。霜女は秀林院の最期にあたり殉死を望んだが、その命に従い、主君忠興に報告のために脱出している。未定稿「烈女」の霜女と思しい語り手も、その出自・年令は不明であるが、「正身の『まりや様』かと思ふ位、お美しい」秀林院の「気高さ」と「お思ひやりの深い」人間性に心酔する侍女に設定されている。

これに対して、「糸女覚え書」の語り手糸女は、魚屋清左衛門なる南蛮貿易商の娘で、秋口には三年間の秀林院付けの奥女中勤めを退き、町家へ嫁入りすることが予定されている。そのため、女主人と主家の人間たちに一定の身分的、また処世観上の距離感を有しており、町人娘の合理主義的・功利的な視座から秀林院とその周囲の人物像を批判し、その最期の様相を見届けた報告者の位相に立つことになる。

糸女の成長期は秀吉の全国統一による桃山文化が現出した時期であり、糸女が秀林院に仕えた慶長三年（一五九八）は、京都醍醐寺の花見に代表される秀吉政権の絶頂期にあたる。以後、同年八月の秀吉の死を経て関ヶ原に至る二年余は、次の覇権争奪の期を窺う表面上の平穏期にあたっていた。その華麗な京阪文化と南蛮貿易商の娘として異国文化に親近して成長した糸女に、戦国末期の血腥い時代相を見通す眼や、秀林院を緊縛する武家社会の儒教的婦道倫理は存在しない。従って、糸女は、国の覇権をめぐる相次ぐ戦いの狭間を生き抜き、封建婦道倫理に従って死の運命に殉じた女主人を、冷然と突き放す設定となっている。

芥川はまず、糸女の秀林院批判の根底に、その南蛮かぶれに対する嫌悪感を設定する。

秀林院様はよろづ南蛮渡りをお好み遊ばされ候間、おん悦び斜ならず、わたくしも面目を施し候。尤も御所持の御什器のうちには贋物も数かず有之、この「かなりや」ほど確かなる品は一つも御所持御座なく候。

それは、異文化の流入に嫌悪感を抱く庶民感情を直截に表現したも

（四）

のであり、キリシタン信仰とその文化への嫌悪に通底する。しかも、糸女は貿易商の娘として女主人より南蛮文化に通暁しているとの自負を有しており、「贋物も数かず有」る什器類をそれと知らず愛蔵する女主人の西欧文化心酔への批判は、蔑視にまで進んでいた。従って、西欧の文物を絶対視し、「日本国の女の智慧浅きは横文字を読まぬゆゑ」であるとする秀林院の「賢女ぶらるる」態度には、強い反感を抱いている。

一方、糸女は秀林院仕えの生活が「浮きたる話などは相成らず」、「兎角気のつまるばかり」であると言う。そこに、男女間の恋愛沙汰に強い関心を持つ、嫁入り前の町娘の浮薄な生活感情も認められる。キリシタン信仰に根ざした秀林院の厳格な生活態度と、それに生理的な嫌悪を露わにする糸女との決定的な心理的乖離も見て取ることができよう。次の一節は、糸女の秀林院批判の根底にある、両者の心理的対立を如実に語っている。

御機嫌もこの時より引きつづき甚だよろしからず、ことごとにわたくしどもをお叱りなされ、又お叱りなさるる度に「えそぼ物語」とやらをお読み聞かせ下され、誰はこの蛙、彼はこの狼などと仰せられ候間、みなみな人質に参るよりも難渋なる思ひを致し候。殊にわたくしは蝸牛にも、鴉にも、豚にも、亀の子にも、棕櫚にも、犬にも、蝮にも、野牛にも、病人にも似かよひ候よし、くやしきお小言を蒙り候こと、末代迄も忘れ難く候。

作中に出る「えそぼ物語」は言うまでもなく、文禄二年（一五九三）刊のキリシタン版『エソポのファブラス』（伊曽保物語）を指すのであろう。ガラシャ関係の文献に『エソポのファブラス』は見当たらないが、芥川の作品には既に大正六年の「蛙」にイソップの名があり、大正八年三月の「きりしとほろ上人伝」は「伊曽保物語に倣つたものである」[14]という。その他、十一年の「報恩記」、未定稿「孔雀」（大正十二頃）も『伊曽保物語』の寓話を材源にしている。

長谷川郁美氏は作中に出る「えそぼ物語」が「『糸女覚え書』の深層に仕掛けられた」「かくし絵」であると捉え、そのパロディ性を次のように説く。

『えそぼ』の耽読に勤しむ秀林院は、自分のすぐ間近にイソップのような裏側からの観察者の眼が鋭く光っていることに全く気付かない。そればかりか、自身があたかもこの作者になった如く、「誰はこの蛙、彼はこの狼」と大勢のイソップ達に訓えて聞かすという滑稽劇を演じているのである。[15]

キリシタン版の寓話を手に「智慧浅き」侍女らの教導を試みる秀林院と、その姿を冷笑を帯びて注視する侍女らの構図は、確かにその諷刺性を生み出していると言いうるであろう。この諷刺は、「天明のはしめの年阿蘭陀舶来にて初めて江戸駿河台辺の人これをもとめて庭籠にて子を生しめ高金を得たり」[16]とある「かなりあ」を百七十年前の慶長年間に登場させ、糸女の父魚屋清左衛門の献上物のいかがわしさを暗示する構図としても捉えられようか。

ともあれ、傍線部は、糸女の秀林院に寄せる憎悪の感情のみならず、秀林院の一侍女に対する異常なまでの拘りをも示している。即ち、主従関係を越えた両者の感情的な対立を描いたこの一節は、秀林院の「はしたなさ」の摘出のみならず、憎悪の感情を露わにした糸女の秀林院批判の、客観的事実性に寄せる読者の信頼を相対的に弱める働きをもなすことになる。

秀林院の信仰についても、「のすのす」という異国語の奇妙な語感、意味不明な祈りの言葉に冷笑を催すのみであり、それを信仰そのものの嘲笑へと拡大させているのであるが、その内実は理解しがたいものへの蔑視に止まっている。糸女は秀林院の信仰の内実や、キリシタン信仰に心の拠り所を求めた女主人の不遇な境涯に関心を持つことはない。従って、それはキリスト教批判ではなく、女主人との感情的対立を基底に据えた、その南蛮好みへの嫌悪と蔑視、厳格な信仰生活の強

制への反発、その独善的な思考・態度への辟易などの外形的批判に止まると言ってよい。糸女の言辞が秀林院の信仰そのものへの批判に達し得ているかという疑問が提起される所以である。

このような語り手の位相を踏まえて、完節の貞女ガラシャの偶像破壊を意図したとする通説を検証すれば、糸女による秀林院の容姿の貶下、人柄への非難・蔑視には客観性が乏しく、信仰の内実には無理解であり、ガラシャの信仰の胚胎から殉教に至る典拠史料の史実解釈を転換しうるものではない。悪意を帯びた語り手にガラシャ殉教の顚末を赤裸々に語らせた意図は、偶像破壊とは位相を異にするものであったのではなかろうか。

## 三　秀林院の位相

キリシタン史に名高いガラシャの信仰の胚胎から殉教への顚末は、完節の貞女伝説として『日本西教史』『近世日本国民史』などに詳述されている。

織田信長の命により忠興に嫁したガラシャは、本能寺の変により謀反人の娘として離別のうえ丹後の味土野山中に幽閉され、秀吉・家康の計らいで忠興の妻として復帰した。以後、忠興を通じて高山右近の説くキリシタンの教義に関心を深め、受洗するに至った。折から秀吉のキリシタン退去令が発布され、忠興の厳しい棄教の要求に耐えて信仰を貫き、関ヶ原の折に夫の命に従って自害した。殉教の経緯は「霜女覚え書」に詳しいが、その殉節は、「若し我不在中他諸侯より夫人を眷恋請求せらるゝか、或は掠奪せらるゝ等の危険に迫らば、直に夫人を刎首して自ら屠腹すべし。」[17]との命に従ったものであった。

ガラシャの信仰に至る悲嘆、苦悩の日々、夫との確執、受洗と夫の迫害など、その信仰の内実とそれを取り巻く歴史的環境については、『日本西教史』『近世日本国民史』などを通じて芥川も知悉していたと思われる。また、その天成の美貌と忠興の嫉妬深さは、『近世日本国民史』に屋根葺きの者への凶刃の逸話として語られており、未定稿「烈女」では食膳の髪の毛をめぐる料理人への凶刃の話として取り入れられた。しかし、「糸女覚え書」はこれらの史実・逸話を全て排除し、秀林院の生涯最後の数日間における忠興留守邸の動静に焦点を絞っている。

作品は、決定的な孤立無援の状態の中で死の運命と抗い、死を逃れがたい天の試練として受け入れるまでの数日間の秀林院の内面を明らかにしようとする。突然突き付けられた死の現実、苛酷な運命に身もだえる秀林院の内面に肉薄するために、作者は糸女という虚構の語り手を設定し、冷淡・酷薄な観察者の眼を与えることで、偶像化された聖女の生な人間性を注視するのである。

典拠史料「霜女覚え書」によれば、ガラシャ殉教の顚末は以下の通りである。

慶長五年七月十三日、留守居役の少斎・石見から、三成方による大名の人質策の風聞について秀林院に対応の伺いがあった。これに対して、秀林院は三成と主人忠興は不仲であり、まず当家に対する人質要求が予想されるが、最初でない時は他家の対応に倣い、最初の場合は両人が対応を分別するように伝える。少斎・石見は、与一郎忠隆、与五郎興秋は主君忠興と家康の上杉討伐に従軍しており、内記忠利は江戸に人質に出ているため、人質に出すべき人物がない旨返答するが、押して強要された場合は丹後にいる先君幽斎（藤孝）の出府、または指図を仰ぐ旨返答すると上申し、秀林院も了承した。即ち、この時点では秀林院自身への人質要求であることは、留守居役も秀林院も理解していない。

次いで、三成方では秀林院の許に澄見という出入りの比丘尼を派遣し、秀林院が人質として大坂城に移ることを要求したが、秀林院は夫忠興の立場を顧慮して拒否した。そこで、澄見は与一郎室の姉が嫁した浮田秀家邸に移ることを求めたが、秀林院は秀家が三成方に付いて

いることから、これも拒否した。

十六日、ついに三成方から正使が立ち、秀林院を人質として要求したため、少斎・石見は切腹覚悟で拒絶した。秀林院は敵が侵入した時は少斎の介錯により自害する意志を固め、与一郎室も敵方に出すことはできないので、共に自害することを約する。同日深夜、表門警護の任についた稲富伊賀が敵方に寝返ったため、少斎は秀林院に最期を告げたが、与一郎室は密かに脱出したので、秀林院は少斎の介錯により果てたという。

これに対して、芥川は典拠史料の十三日から十六日深夜に至る四日間の出来事を十日から十六日深夜の七日間に拡大し、十三日の留守居役の伺いに先立って、十一日に三成方から澄見を介して秀林院に内々の人質対応要求がなされたとする設定に変えている。即ち、一触即発の緊迫した状勢と夫忠興の厳命に徴して見れば、三成方による人質対応の要求は、秀林院に自ら死に瀕する事態に直面したことを自覚させるに充分であったはずである。

澄見の誘いに「中中しかとせる御決心もつきかね候やうに見上げ」られる秀林院の様子、「『まりや』様の画像の前に、凡そ一刻に一度づつは『おらつしよ』と申すおん祈りを一心にお捧げ遊ば」している姿、翌十二日は「朝より秀林院様の御機嫌、よろしからざるやうに見上」られ、「えそぽ物語」を例に与一郎室に訓話を施す姿には、突然の運命の変転に動揺する秀林院の取り乱した姿が認められる。秀林院の祈りは「時課」の勤めを指すのであろうが、作品では信仰に救いを求める秀林院の必死な姿が浮き彫りにされている。

従って、十三日の留守居役による人質要求への対応の伺いは、澄見を通して既知の事として侍女らの嘲笑を買うことになる。また、秀林院の返答に対して、糸女は「少斎石見の両人も分別致しかね候へばこそ、御意をも伺ひし次第に候へば、秀林院様のおん言葉は見当違ひ」であり、留守居役の対応策についても、秀林院と侍女らを脱出させて留守居役が責任を取るべきであるのを、「一も二もなき喧嘩腰にて、側杖を打たるるわたくしどもこそ迷惑千万」であると難じている。

一方、秀林院は「又また『まりや』様の画像の前に『のす、のす』をお唱へ遊ばされ、梅と申す新参の女房、思はず笑ひ出し候へば、以ての外のことなりとさんざん御折檻を蒙」ったという。霜女の復命に対しても、秀林院は「御返事も遊ばされず、唯お口のうちに『のす、のす』とのみお唱へなされ居り候へども、漸くさりげなきおん気色に直られ」、「且は御機嫌もこの時より引きつづき甚だよろしから」ざるようになる。

三成方の人質強要への対応として、糸女は留守居役の伺いに明確な対応策を指示しない秀林院への批判を洩らしているが、秀林院と侍女らを密かに逃がし、留守居役が敵と戦うという構図は、夫の厳命への違反、功利的手段として、秀林院の封建婦道の倫理には背馳する。従って、主人らの覇権争いの巻き添えを嫌い、「夫を六人も取り換へたるいたづら女」「虫唾の走るほど厭」な「大嫌ひの狸婆」と嫌悪した澄見の提案を、「第一に世間の妙聞もよろしく、第二にわたくしどもの命も無事にて、この上の妙案は有之まじく」と捉える糸女の打算的な処世観とは相容れないものであった。

史上のガラシャの殉節は「儒教思想の上に融合された日本的キリシタン婦道」[18]と呼ばれるものであるが、人質強要への対応を「第一にはお留守居役の無分別よりことを破り、第二には又秀林院様御自身のお気性より御最期を早められ候も同然の儀」と捉え、「迷惑千万」「愈迷惑」と唾棄する糸女の功利的思考とは決定的に対立する。

『日本西教史』によれば、侍女らはこの時既に受洗しており、ガラシャの入信の勧めに対して家臣らは武士道の倫理に従って自害することを主張したため諦めたことが記されている。これに対して、芥川は秀林院の入信勧告に対する侍女らの当惑と、偽りの入信を誓う糸女らのエゴイズムを点叙する。キリシタン信仰の「強制」と「排他的独善」

が認められるが[19]、秀林院と侍女らの決定的な心理的乖離をも描いている。

かくして、秀林院の周囲には緊急事態に冷静・適切な対応能力を持たない無能な侍臣と、女主人の運命や心情への理解・同情の念を持たない、冷笑を帯びた侍女らしか存在しない。その孤立無援な状態の中で、秀林院は死の現実と恐怖のために崩れ落ちようとする乱れ心を、信仰と自恃によって必死に支えようとする。そのとき、矜持と傲慢さ、動揺と独善のはしたなさ、その全てを露呈してしまうのが、人間の真実の姿であろう。秀林院の心理の動きに無関心な糸女の冷淡な視線と嘲罵の言葉により、むしろ信仰に縋りきれない秀林院の心の乱れを鮮明に形象することに成功したのである。

与一郎室が密かに脱出したことへの秀林院の怒りについて、糸女はその「はしたなさ」を冷笑する。与一郎室と共に自害する約束は典拠「霜女覚え書」第六条に「与一郎様御上様へも、人質に御出し有間敷候儘、是も諸共に御自害なさるべき由、内々御約束御座候事。」とあり、『細川忠興軍功記』によれば「御嫁子様は。乗物三挺にて大和殿屋敷之前御通りにて。肥前殿屋敷へ御入被成候[20]」とある。与一郎室は関ヶ原ののち忠興の激怒により離別され、事は与一郎の廃嫡に及んでいる。

従って、史的背景を見れば、与一郎室の脱出は東西両軍の人質問題に関わり、かつ封建婦道倫理に背馳する行為であり、糸女の非難するような秀林院の強要であるとのみは解しえない。しかし、芥川は与一郎室への同情と命が助かることを全てに優先させる糸女の眼を通して、自らの内にも存在した死の運命からの脱出の願い、期待と、それを叶えてくれない重臣への憤りの為に醜態を晒す秀林院像を形象したのであった。

芥川は作品の末尾に、突然現れた若衆への羞恥心を示す秀林院像を点叙する。

（八）

秀林院様は右のおん手にお髪をきりきりと巻き上げられ、御覚悟の体に見上げ候へども、若き衆の姿を御覧遊ばされ、羞しと思召され候や、忽ちおん顔を耳の根迄赤あかとお染め遊ばされ候。わたくし一生にこの時ほど、秀林院様の御器量をお美しく存じ上げ候こと、一度も覚え申さず候。

これは史料離れの一節であるが、先学の見解は「貞女、烈女の裏面に対する苛辣な視線[21]」を捉え、偶像破壊の徹底を見る立場から、糸女に託した芥川のキリスト教批判の曖昧さの例として「芥川の、人間としての、芸術家としての痛々しさ脆弱な性格の一面を[22]」認め、「自刃を前に、若衆に心をうばわれる愚か[23]」さを見る通説に対して、「若衆に顔を赤らめる瞬間の彼女を美しいとする表現に、女性たる性にあくまで自然に生きることを尊ぶ素直な芥川の女性観が現われている[24]」と解するなど、大きな振幅を示している。しかし、傍線部は秀林院の変貌のみならず、糸女自身の秀林院観の決定的な転換を印象づける。

突然の死という逃れがたい運命の到来、夫の厳命、無能な留守居役、侍女らとの心理的対立、信仰によっては抑えがたい心の戦き、共に自害を約した与一郎室の裏切り、侍女らの離散、さらに追い討ちをかける護衛役稲富伊賀の寝返り、全てを失いつくした秀林院の前に「萌葱糸の具足に大太刀を提げ」た若侍が登場する。「太閤殿下と天下を争はれし惟任将軍光秀を父とたの」む血筋への矜持も、「死しては『まりや』様を母とたの」むキリシタン信仰も恃みえず、動揺と醜態を晒した果ての最期の場において、秀林院は無垢な女心と生気を回復するのである。

細川家に嫁して以来、夫忠興以外の「男の顔を御覧遊ばされ候は今日この少斎をはじめと致され候よし」という誇張表現を前提にすれば、死に際の愚かな羞恥心とも解されようが、芥川が主家の危機に奮戦する若侍を登場させることにより、全てを失い尽くした秀林院の魂に救いを与えたことは認められなければなるまい。秀林院の自恃も信仰も、

全てを虚飾として嫌悪と蔑視を露わにした糸女にあっても、全てを失い、家臣の刃の前に身を委ねようとする女主人の姿に、美しい女人像を見たのであった。

典拠「霜女覚え書」によれば、三成方の軍勢はガラシャの自害以前に兵を引き上げたという。しかし、忠興室の自害は三成方の内室人質策に齟齬を生ぜしめ、関ヶ原の戦の帰趨に影響を与え、またガラシャ殉教の悲劇を形成することになった。これに対して、「糸女覚え書」では動揺と醜態を晒した果ての殉節を描くことにより、その死の無意味さはより鮮明になったと言ってよい。

## 四　芥川の位相と「糸女覚え書」の位置

本篇制作時を含む数年間は、芥川の実生活で、身体的・対社会的に大きな転変の生じた時期でもあった。大正十年三月から四ヶ月にわたる中国旅行以来著しく健康を害した芥川は、胃腸の病、神経衰弱、不眠に苦しんで「痩躯一層痩せて蟷螂の如く」（大正十・九・八、薄田淳介宛）になり、翌十一年正月には知人に「死相がある」[25]と指摘される程の憔悴ぶりを示す。「目下病むところ第一胃、第二腸、第三頭、第四心臓」（大正十一・二・十八、同）という健康の衰えは、その創作力の著しい減退をもたらし、「この頃雑誌にも小説を書かず旧稿に手を入れたる位にてお茶を濁し居」（同）るという状態になる。この正月頃から書斎名を「我鬼窟」から「澄江堂」と改めて、以後は「澄江堂主人」の署名を用いるなど、心機一転を期して創作に向かったが、十一月には次男多加志の誕生もあり、「心臓をいため又胃腸をそこなひずつと病臥、新年号の小説の約束も三つ四つありましたが皆断りました」（同年十二・二、真野友二郎宛）という宿痾の昂進の中で、家計を支える重荷に喘ぎ、「この頃しみじみ売文糊口の難きを思ひ居る次第」（同、与謝野寛宛）と悲鳴を洩らしている。

十二年の春には、「漸元気恢復いたし、健啖をきはめ居り候」（四・十四、岡栄一郎宛）と記す程の回復を見せたが、この年は、義兄西川豊の入獄（一月）、有島武郎の情死（七月）、関東大震災（九月）、大杉栄の虐殺（同）、折からのプロレタリア文学運動の興隆など、その身辺を揺るがす事件が相次ぐ。これらの事件は文芸界に多大な影響と深刻な打撃を与えたが、芥川は自己の世界に閉じこもって明瞭な反応を示していない。その波紋は、心身の疲労と衰弱が進行する中で心意の内部に深く沈潜し、やがて晩年の苦悩として浮上してくることになるのである。

「糸女覚え書」は、死と信仰（宗教的救済）の問題を最もリアルな場で追究しようとした意欲作であった。そのことはまた、大正十二年末の芥川の心の内部に密かに死が忍び寄ってきたことを示すのではなかろうか。

（平成十三年四月九日受理）

〔注〕

（1）吉田精一著『芥川龍之介』（昭和一七、三省堂）「二十五　黄雀風」。

（2）武藤光麿「芥川龍之介の創作態度について―『糸女覚え書』をめぐって―」（「熊本大学教育学部紀要」一三号、昭和三九・三）。

（3）山本健吉「芥川龍之介論」（『近代日本文学研究・大正文学作家論・下巻』昭和一八、所収）。

（4）吉田「糸女覚え書」（岩波書店刊『芥川龍之介全集』月報6、昭和五三）。

（5）大正十五年一月十六日付葛巻義敏宛、同二十一日付芥川道章宛、二月八日付片山弘子宛書簡など。

（6）呂宋助左衛門の名は「報恩記」（大正一一・四）に出ている。

（7）（4）に同じ。

（8）岩上順一著『歴史文学論』（昭和一七、中央公論社）「十六　古代の衣裳・『尾形了斎覚え書』『糸女覚え書』等について」。

(9) (1) に同じ。
(10) 佐藤泰正「切支丹物―その主題と文体」（「国文学解釈と教材の研究」二二巻六号、昭和五二・五）、河泰厚「『糸女覚え書』小考」（「新樹」一一号、平成八・九）など。
(11) (3) に同じ。
(12) 坂本浩「きりしたん物」（「国文学解釈と鑑賞」二三巻一一号、昭和三三・八）。
(13) 笹淵友一「芥川龍之介のキリスト教思想」（同前）。
(14) 「風変りな作品二種に就て」（大正一五・一「文章往来」）。
(15) 長谷川郁美「『瞞し絵』の文学―芥川龍之介『糸女覚え書』におけるパロディの方法について―」（「日本文学研究」二八号、平成四・一一）。
(16) 『増補俚言集覧・上』（明治三二）に拠る。
(17) 『日本西教史・下』（大正一五、太陽堂書店）。
(18) 海老沢有道著『切支丹の社会活動及南蛮医学』（昭和一九、冨山房）三二七頁。
(19) (10) の河氏の論。
(20) 『群書類従・第貳拾輯下』所収。
(21) (4) に同じ。
(22) 佐々木啓一「芥川龍之介のキリスト教観―続切支丹物について―」（「論究日本文学」一〇号、昭和三四・四）。
(23) 三好行雄「作品解説」（角川文庫『少年・大導寺信輔の半生』）。
(24) 石割透「第七短編集『黄雀風』」（「国文学解釈と教材の研究」二二巻六号、昭和五二・五）。
(25) 「病中雑記」（大正一五・二「文芸春秋」）。

## A Composition of "Itojyo-oboegaki"

Toshikazu KATSUKURA

"Itojyo-oboegaki" by Ryunosuke AKUTAGAWA is his historical novel that depicted the complicated anecdote in the year 1600 A. D.

AKUTAGAWA was based on the famous story telling of martyrdom by Gracia, and added the experience of his own.

This essey made clear the original work and the intention of AKUTAGAWA in contrast with the historical materials, and actual problems.